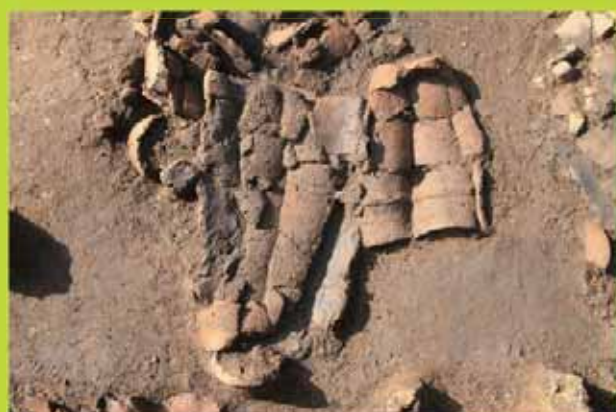


平成29年度
青森県埋蔵文化財発掘調査報告会



平成29年12月9日(土)

会場 青森県総合社会教育センター

主催 青森県埋蔵文化財調査センター

日 程

■スライド等による発掘調査の報告（2階 大研修室）10:15～15:40

開催挨拶（青森県埋蔵文化財調査センター所長） 10:15～10:20（5分）

- 1 内田（2）遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 10:20～10:30（10分）
- 2 安部遺跡（尻労安部洞窟）（尻労安部洞窟遺跡発掘調査団） 10:30～10:50（20分）
- 3 早稲田（1）貝塚（三沢市教育委員会） 10:50～11:10（20分）
- 4 柄貝遺跡外（青森県教育庁文化財保護課） 11:10～11:30（20分）
- 5 外の沢（5）遺跡外（県埋蔵文化財調査センター） 11:30～11:50（20分）

質疑応答—— 11:50～12:00（10分）

休憩・遺物展示等見学—— 12:00～13:00（60分）

- 6 釜ノ平（2）遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 13:00～13:10（10分）
- 7 後平（1）遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 13:10～13:20（10分）
- 8 米山（2）遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 13:20～13:40（20分）
- 9 亀ヶ岡遺跡（つがる市教育委員会） 13:40～13:55（15分）

質疑応答・休憩—— 13:55～14:15（20分）

- 10 熊野堂遺跡（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館） 14:15～14:30（15分）
- 11 坂本館（弘前市教育委員会） 14:30～14:50（20分）
- 12 篠塚遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 14:50～15:05（15分）
- 13 弘前城二の丸（弘前市公園緑地課） 15:05～15:20（15分）

質疑応答—— 15:20～15:40（20分）

■出土品とパネルの展示（2階 第1研修室）10:00～16:00

- ・報告遺跡から出土した遺物をパネル展示と併せてご覧いただけます。
- ・特集展示「奈良時代の青森県」もご覧いただけます。

■青森県立図書館による関連図書の展示及び貸出

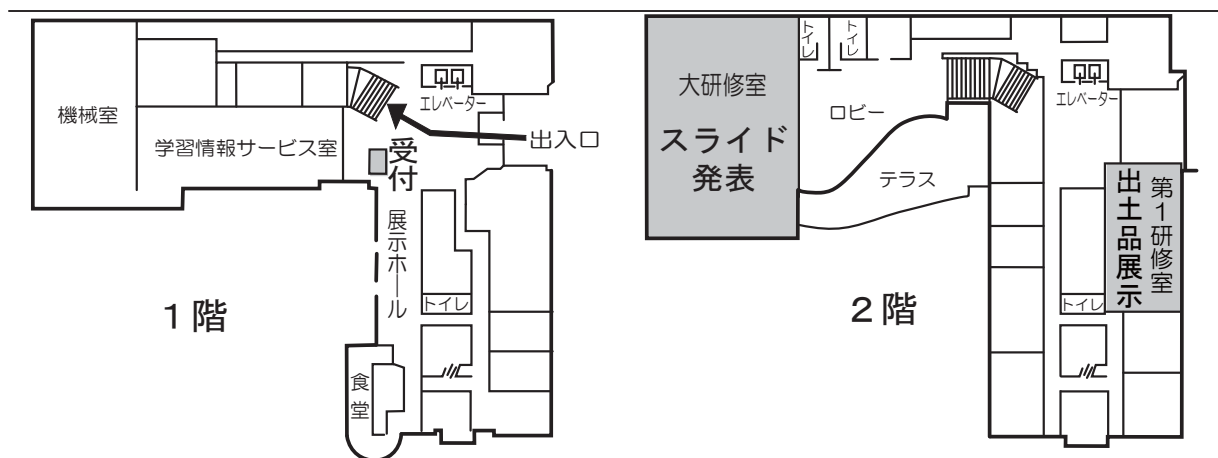
（2階 第1研修室）10:00～16:00

本報告会は県民カレッジ単位認定講座です。
単位認定希望の方は、1階受付までお知らせ下さい。

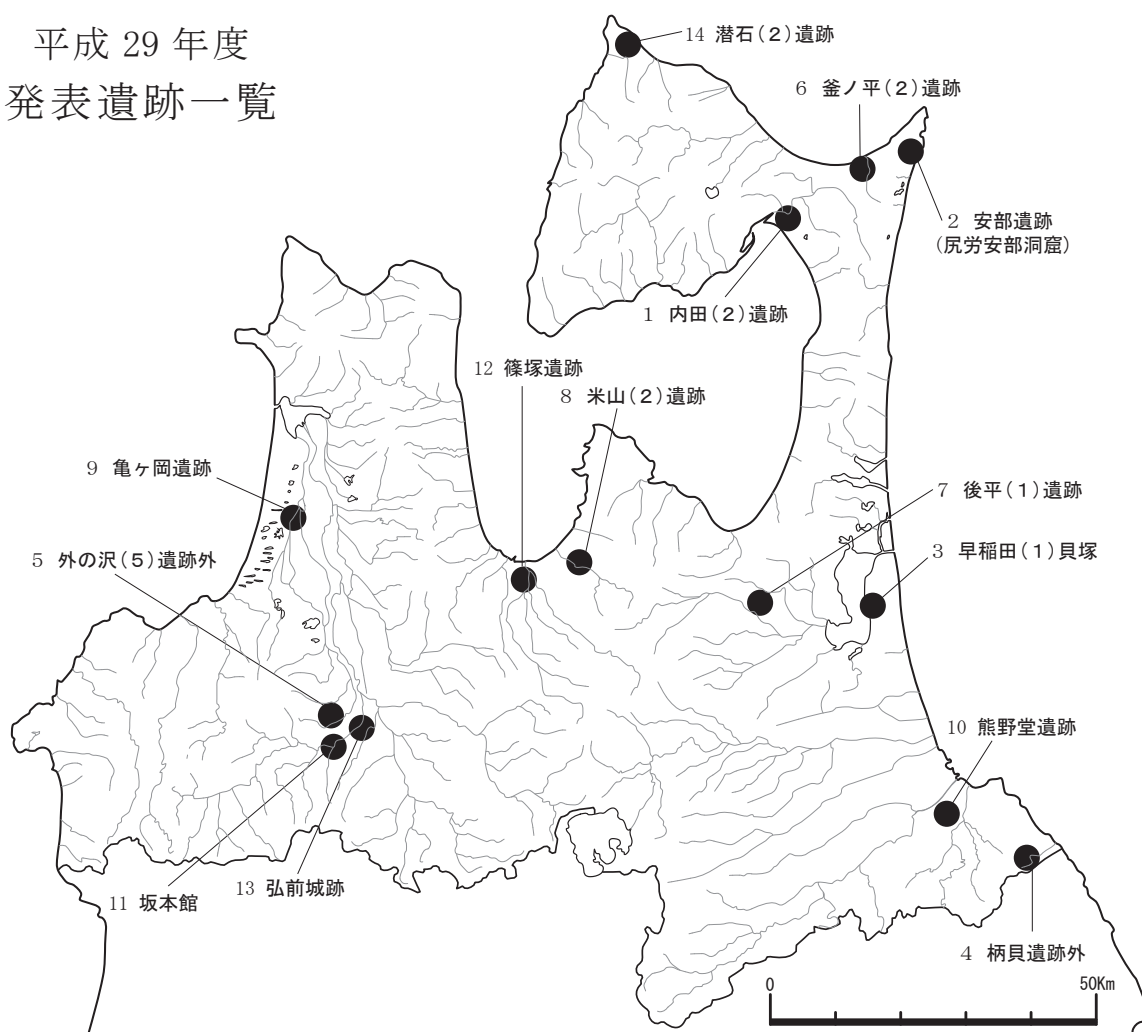
目 次

目 次	i
平成 29 年度 発表遺跡一覧	iii
1 内田（2）遺跡	1
2 安部遺跡（尻労安部洞窟）	2
3 早稲田（1）貝塚	4
4 柄貝遺跡外	6
5 外の沢（5）遺跡外	8
6 釜ノ平（2）遺跡	9
7 後平（1）遺跡	10
8 米山（2）遺跡	11
9 亀ヶ岡遺跡	12
10 熊野堂遺跡	14
11 坂本館	16
12 篠塚遺跡	17
13 弘前城二の丸	18
紙上報告	
14 潜石（2）遺跡	19
用語解説	20
年 表	24

【会場のご案内】 スライド発表・出土品の展示は2階で行います。



平成 29 年度 発表遺跡一覧



番号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 担 当 機 関	調 査 原 因
1	内田(2)遺跡	むつ市大字田名部字内田地内	県埋文センター	国道279号むつ南バイパス道路改築事業
2	安部遺跡(尻労安部洞窟)	東通村大字尻労字安部	尻労安部洞窟遺跡発掘調査団・慶應義塾大学	学術調査
3	早稲田(1)貝塚	三沢市大字三沢字早稲田	三沢市教育委員会	保存目的
4	柄貝遺跡外	階上町道仏字柄貝外	青森県教育庁文化財保護課	一般国道45号洋野階上道路建設事業
5	外の沢(5)遺跡外	弘前市大字新岡字外ノ沢地内	県埋文センター	県営外の沢地区通作条件整備事業
6	釜ノ平(2)遺跡	東通村大字野牛字釜ノ平	県埋文センター	野牛地区漁港関連道整備事業
7	後平(1)遺跡	七戸町字後平	県埋文センター	一般国道45号天間林道路建設事業
8	米山(2)遺跡	青森市大字宮田字米山	県埋文センター	新青森県総合運動公園整備事業
9	亀ヶ岡遺跡	つがる市木造館岡亀山地内ほか	つがる市教育委員会	史跡追加指定を目指した内容確認調査
10	熊野堂遺跡	八戸市長根二丁目及び大字売市	八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館	道路拡幅工事
11	坂本館	弘前市大字館後字新田	弘前市教育委員会	市道国吉館後線道路改築事業
12	篠塚遺跡	青森市大字上野字篠塚地内	県埋文センター	県営上野地区農地整備事業
13	史跡津軽氏城跡弘前城二の丸	弘前市大字下白銀町	弘前市公園緑地課	史跡整備(弘前城二の丸活用施設等整備事業)
14	潜石(2)遺跡	風間浦村大字蛇浦字潜石地内	県埋文センター	県営下北北部地区中山間地域総合整備事業

うちだ 内田(2)遺跡

― 釜臥山を臨む縄文時代の溝状土坑群 ―

所在地：むつ市大字田名部字内田地内

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成 29 年 4 月 19 日～10 月 27 日

調査原因：国道 279 号むつ南バイパス道路改築事業

遺跡の概要

内田(2)遺跡は、下北駅の南東約 5 km、標高約 8 ～ 10 m の海成段丘^{かいせいだんきゅう}上に位置します。周辺には、縄文時代後期前葉(約 4,000 年前)の環状に巡る掘立柱建物跡群^{ほったてばしらたてものあと}が確認された内田(1)遺跡や、縄文時代中期後葉(約 4,200 年前)の最花貝塚^{さいばなかいづか}などが分布しています。

今年度の発掘調査は、国道 279 号むつ南バイパス(下北半島縦貫道路)道路改築事業にともなうもので、4 月 19 日～10 月 27 日まで、約 11,000 m²を調査しました。

遺構の種類

現道の北側を A 区、南側を B 区として調査を行いました。その結果、縄文時代のものと考えられる、溝状土坑^{みぞじょうどこう} 29 基、土坑^{しゅうせきどこう} 3 基、集石遺構^{しゅうせきいこう} 1 基、焼土遺構^{しょうどいこう} 2 基が確認されました。なお、土坑には形態等から、貯蔵穴^{ちようぞうけつ}と考えられるものが含まれます。

遺物の概要

主に縄文時代後期前葉(約 4,000 年前)の土器や石器が、段ボール箱で 11 箱分出土しました。また、旧石器時代(約 15,000 年より前)の石器が 1 点出土しています。

遺跡の特徴

今回の発掘調査で、内田(2)遺跡は主に縄文時代の狩り場として利用されていたことがわかりました。ただ、貯蔵穴や集石遺構などが確認されていること、縄文時代後期前葉の遺物が出土していること等から、周辺にはこの時期のムラが存在することが推測されます。

また、旧石器時代の遺物も出土しており、縄文時代よりも前からこの土地が利用されていた可能性が高いことがわかりました。

(濱松優介)



溝状土坑 完掘状況(北西から)

あべ しつかりあべどうくつ 安部遺跡(尻労安部洞窟)

ー旧石器時代の洞窟遺跡ー

所在地：下北郡東通村大字尻労字安部 39-3
調査機関：尻労安部洞窟遺跡調査団・慶應義塾大学
調査期間：平成 29 年 7 月 30 日～8 月 10 日
調査原因：学術調査

遺跡の概要

尻労安部洞窟は、下北半島北東部に位置する石灰岩洞窟です。桑畑山の南東麓、標高約 33 m の地点に開口する当洞窟は、今日、間口 3.3 m、奥行き 2.5 m の岩陰状をなし、旧石器・縄文・弥生時代の遺跡として登録されています。慶應義塾大学を中心とする調査団は、本遺跡において旧石器時代の石器・動物骨・人骨の発見を目指し、2001 年度より学際的な調査・研究を重ねています。

これまでの調査によって、Ⅱ～Ⅵ層から縄文時代（早～後期）の土器、石器、人骨、動物骨が発掘されており、旧石器時代の文化層に当たるⅧ層～ⅩⅤ層からはナイフ形石器 2 点、台形石器 1 点、二次剥離剥片 1 点、剥片 1 点と動物骨が近接して出土しています。また、昨年度からはこれまで洞窟利用の様子が不明であった洞奥部東側に調査区をひろげ、発掘をおこなったところ、Ⅱ層を中心として最低 2 個体に由来する 70 点ものオオヤマネコ遺体が出土しました。

2016 年度出土オオヤマネコ遺体の研究成果

放射線炭素年代測定の結果、出土した 2 個体の年代はそれぞれ縄文時代後期・晩期であり、マイクロ CT 画像による歯牙の分析からは、両個体が生後 10 ヶ月未満であることもわかりました。また安定炭素・窒素同位体分析からはオオヤマネコが草食獣を主餌としていたこと、mtDNA 分析の結果からは、現在アジア及びコーカサスに分布する個体群と同一の起源を持つ一方で大陸種からの遺伝的分化が生じていることもわかりました。

本年度の調査成果

今年度の調査では、過年度出土オオヤマネコ遺体の平面的な広がりを確認するために、昨年度拡張した洞奥部東側調査区をさらに広げ、縄文時代の文化層を含むⅧ層上面までの掘り下げをおこないました。また洞窟全体の堆積状況の確認や、洞窟の形成プロセス・周辺環境の解明をめざし、洞窟前庭部では深掘調査もおこないました。

洞奥部東側の調査では、オオヤマネコ遺体の出土はごく少量で、出土範囲は前年度からほとんど広がりませんでした。その他では、例年通りⅡ層を中心として土器片、動物遺体、海生貝類などが出土しています。前庭部深掘調査では発掘最底面が基底部岩盤に達し、ⅩⅤ層以下の堆積状況を確認することができました。ⅩⅤ層に比べてⅩⅥ・ⅩⅦ層から多数の動物遺体が出土しましたが、基底部岩盤に近いⅩⅧ層ではその出土量は少なくなります。

今後は洞奥部東側Ⅷ層以下の掘削や、深掘り区で採取したコラムサンプルの花粉、プラントオパール、珪藻についての分析を進めることで、更新世における洞窟形成プロセス、周辺環境についての新たな知見が得られることが期待されます。

（石本のえる・小谷部優・市田直一郎・吉永亜紀子・澤浦亮平・澤田純明・渡辺丈彦・鈴木敏彦・佐藤孝雄・奈良貴史）

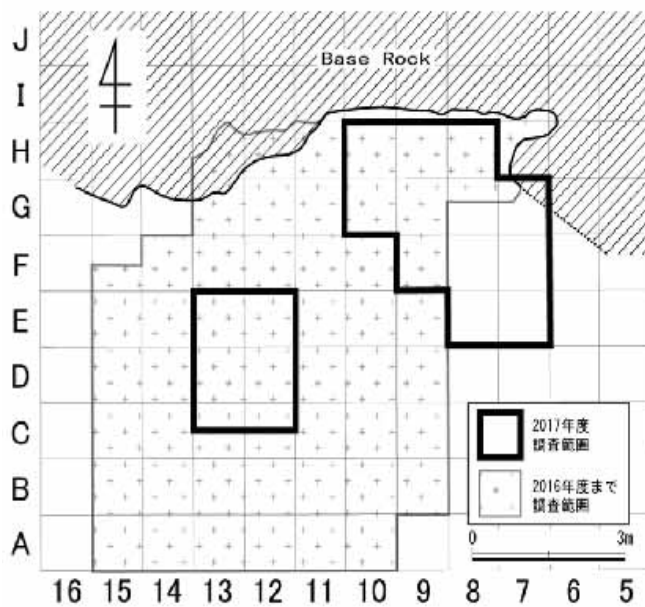


図1 調査範囲



図2 洞窟基底部岩盤

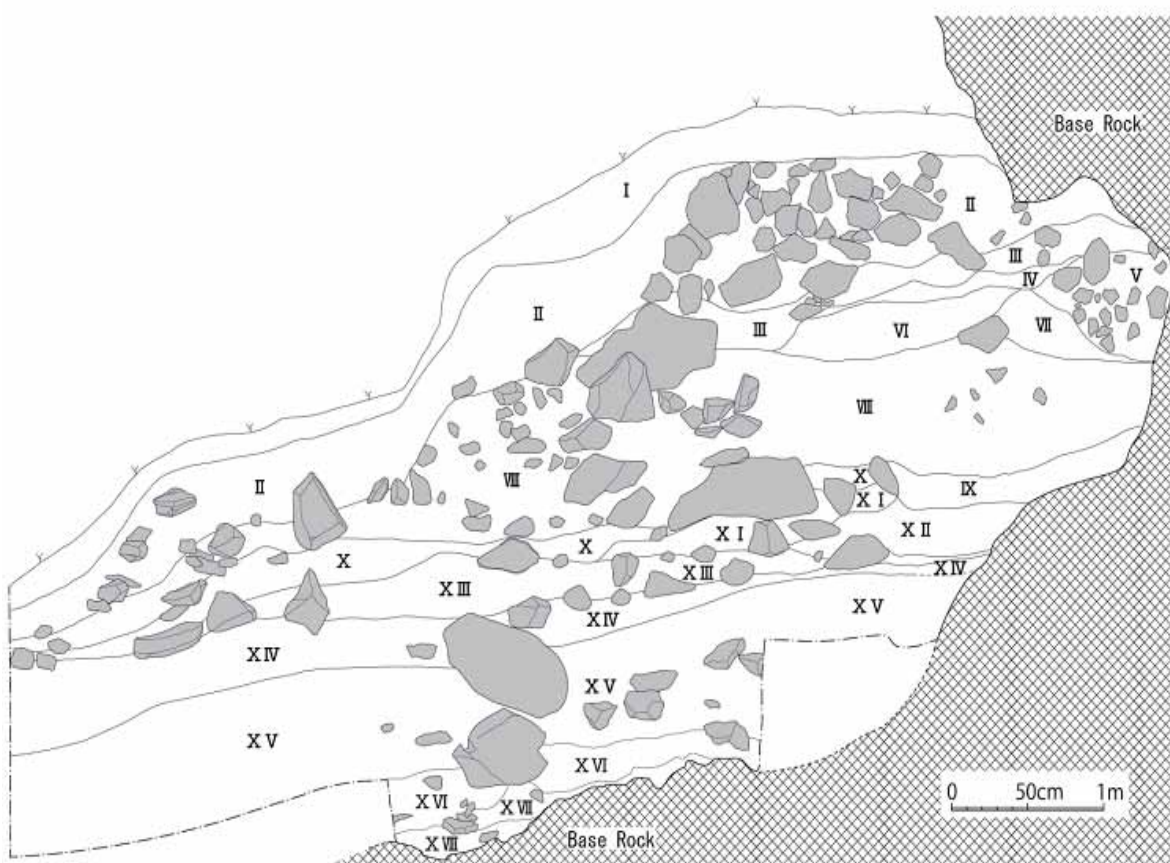


図3 メインセクション図(11-12列)

わ せ だ 早稲田(1)貝塚

－北海道・北東北最古級の縄文貝塚－

所在地：三沢市大字三沢字早稲田

調査機関：三沢市教育委員会

調査期間：平成 29 年 4 月 11 日～6 月 16 日

調査原因：保存目的

遺跡の概要

早稲田(1)貝塚は小川原湖東岸の中央部、湖岸から 150 m 程離れた標高約 15 ～ 30 m の段丘上に立地します。

昭和 31(1956) 年、東京大学東洋文化研究所の佐藤達夫氏らによって発掘調査が行われ、縄文時代早期中葉と早期末葉に形成された 2 つの貝塚や、縄文時代早期中葉から前期初頭にかけて時代順に層ごとに出土する土器などが発見されました。

貝塚はどちらも海水域に棲息する貝類が主体であり、古い時期（早期中葉）の貝塚は、近年まで青森県内最古として知られていました。また、この調査で出土した土器は、青森県周辺におけるこの時期の土器変遷を示す基準資料となっています。

このように、本遺跡は県内最古の貝塚を伴う遺跡というだけでなく考古学史的にも古くから広く知られる重要な遺跡ですが、周辺では土取りや農地造成などの開発行為が頻繁に行われ、いつ本遺跡内にも開発行為がおよぶのか時間の問題というのが現状です。

そこで、三沢市教育委員会は平成 25 年度から各種の開発行為に対応するため、事前に遺跡の内容を把握することを目的とした発掘調査を実施してきました。その結果、未発見の貝塚が 3 地点以上存在することや、昭和 31 年に調査された縄文時代早期中葉の貝塚は「青森県内最古」というだけでなく「北海道・北東北最古級」でもあることなどが確認されました。

こうした成果をうけ、平成 28 年度からは調査目的を開発対応から遺跡を保存する（「国史跡」の指定をめざす）ための内容確認へと変更し、継続して発掘調査を実施しています。

今年度の調査概要

平成 29 年度は、昭和と平成の調査で確認された貝塚の内容確認と遺跡の範囲確認を目的として発掘調査を実施しました。

貝塚の内容確認調査では、これまで不明だった昭和 31 年の調査地点や全体の形状を特定し、当時の調査成果と照合ができるようになりました。また、平成の調査で新たに発見した貝塚は、1 つの地点に複数の貝塚が重層的に形成されていることや、それらはいずれも縄文時代前期初頭以前に形成された可能性が高いことなどが確認されました。

このほか、遺跡の範囲確認調査では、調査前の遺跡範囲（約 2,720 m²）の西側に隣接する約 7,870 m²からも遺物が出土しました。この結果、遺跡範囲は約 4 倍（約 10,590 m²）に拡大することが確認されました。

「国史跡」の指定をめざして

先にふれたように、本遺跡には縄文時代早期中葉に形成された「北海道・北東北最古級（青森県内最古）」の貝塚があります。同時期の貝塚は本遺跡の約 100 m 南に位置する、野口貝塚でも確認されており、三沢市教育委員会では、早稲田（1）貝塚・野口貝塚セットでの国史跡指定をめざし、発掘調査を進めているところです。

「国史跡」とは「日本や地域の歴史を語るうえで欠くことのできない遺跡」のことで、重要文化財級の遺跡であることを意味します。

本遺跡や野口貝塚には、当時の自然環境を知るための情報が豊富に残されています。それだけでなく、両遺跡はこの地域に生きた当時の縄文人が自然（特に海産資源）とどのように関わってきたのかを理解するうえで非常に重要な遺跡なのです。

本遺跡や遺跡内に形成された貝塚には未だ不明な点が多く、課題も少なくありませんが、今後の発掘調査や整理等作業で明らかにしていきたいと考えています。

（工藤 司）



同じ場所に形成された複数の貝塚

がらかい 柄貝遺跡外

— 東日本大震災復興道路建設事業により
調査された遺跡群 —

所在地：階上町道仏字柄貝外

調査機関：青森県教育庁文化財保護課

調査期間：平成 29 年 5 月 23 日～ 8 月 10 日

調査原因：一般国道 45 号洋野階上道路建設事業

遺跡の概要

柄貝遺跡は、階上町役場から南東へ約 4 km、岩手県との県境となる二十一川の左岸に位置し、標高 70 ～ 90 m の段丘上に立地します。一般国道 45 号洋野階上道路建設事業に伴う調査は、平成 25 年度から試掘調査が行われ、遺跡が確認された約 2 km の範囲にわたる 6 遺跡（北から^{どうぶつかぬか}道仏鹿糠遺跡、^{おおぞうりくぼ}大草里窪遺跡、^{しもてんま}下天摩遺跡、^{かみくわきくぼ}上桑木窪遺跡、^{しもたいくぼ}下平窪遺跡、柄貝遺跡）について、発掘調査を実施しました。

遺構の種類

柄貝遺跡の調査は、平成 27 年度及び平成 29 年度に実施し、縄文時代の竪穴建物跡 12 軒、土坑 22 基、溝状土坑 7 基、焼土遺構 2 基、性格不明遺構 1 基を検出しました。竪穴建物跡は南向きの斜面に造られており、溝状土坑は標高の高い部分を中心に分布する傾向があるようです。

竪穴建物跡は、1 軒が縄文時代早期前葉の^{おしがたもん}押型文土器期、9 軒が縄文時代早期末葉から前期初頭、2 軒が縄文時代後期初頭のものです。

遺物の概要

縄文時代早期から後期の土器・石器が出土しています。また、縄文時代早期前葉の押型文土器の包含層から、^{すりきり}擦切磨製石斧の残欠が出土しています。押型文土器は、丘陵の縁辺部及び斜面下である程度まとまって出土しています。

遺跡の特徴

柄貝遺跡周辺では、縄文時代早期前葉の押型文土器期から人の活動痕跡が認められ、早期末葉から前期初頭にはある程度大きな集落が形成されたことがわかりました。従来、押型文土器期の竪穴建物跡は、掘り込みが浅くはっきりしないものが多く見つかっていましたが、柄貝遺跡の例は、深さ約 2m に及び、壁際に柱穴がめぐり、非常にしっかりした造りになっています。縄文時代早期前葉の竪穴建物跡は、この地域における定住の始まりを考える上でも重要な資料であり、現在出土炭化物などの分析から、その詳細な時期を検討中です。

早期末葉から前期初頭の竪穴建物跡は、不整楕円形で地床炉を伴うものが多く、同様の竪穴建物跡は、柄貝遺跡の北西 3 km に位置する藤沢（2）遺跡でも多数検出されています。



洋野階上道路建設事業関連遺跡空撮
（平成 29 年 7 月撮影、上が北西）

また、洋野階上道路建設事業に伴う一連の調査により、中期後葉から後期にかけては、下平窪遺跡、上桑木窪遺跡、下天摩遺跡に、晩期から弥生時代には道仏鹿糠遺跡や藤沢（２）遺跡に集落が営まれた様相を捉えることができます。

一方で、落とし穴と考えられる土坑や溝状土坑は、いずれの遺跡でも検出されており、周辺一帯は狩猟場として縄文時代を通じて利用されてきたと考えられます。また、道仏鹿糠遺跡、下天摩遺跡では、墓坑の可能性が考えられる配石遺構も見つかっています。

出土遺物では、柄貝遺跡、下平窪遺跡、上桑木窪遺跡で縄文時代早期前葉の押型文土器がまとまって出土していることが特筆されるほか、下天摩遺跡で縄文時代後期の石斧製作に関わる資料が多数出土しています。道仏鹿糠遺跡では、製塩土器が出土しており、石斧製作や塩づくりなど、当地域における社会的分業をさぐる上で重要な資料と言えます。

また、上桑木窪遺跡では、古代以降の鉄生産に関わる遺構・遺物が見つかります。三陸沿岸では、製鉄関連の遺構が多数見つかり、それらとの比較を通して、詳しい年代や製作工程の段階を検討して行く予定です。（中門亮太）



縄文時代早期前葉の竪穴建物跡

そと さわ 外の沢(5)遺跡外

ー 岩木山東麓の縄文集落 ー

所在地：弘前市大字新岡字外ノ沢地内

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成 29 年 7 月 4 日～11 月 2 日

調査原因：県営外の沢地区通作条件整備事業

遺跡の概要

外の沢(4)遺跡、外の沢(5)遺跡は、弘前市の西側、津軽平野を望む岩木山東麓に位置しています。沢を境に上方(西側)が外の沢(4)遺跡、下方(東側)が(5)遺跡となっています。遺跡内でも標高差があり、外の沢(4)遺跡の竪穴建物跡付近は標高約 100 m、外の沢(5)遺跡の竪穴建物跡付近は標高約 75m です。リンゴ園地を通る外の沢農道の拡幅整備に伴い、約 4,000 m²を対象とした発掘調査で縄文時代を中心とする遺構・遺物が出土しました。

遺構の種類

外の沢(4)遺跡では、縄文時代後期以降の竪穴建物跡 2 棟、時期不明を含む土坑 16 基、柱穴 30 基、溝跡 6 条が確認されています。竪穴建物跡のうち 1 棟は、柱穴や炉の残りが良く十腰内Ⅲ群期のものでした。この時期の竪穴建物跡の調査例は少なく、貴重な一例となりました。

外の沢(5)遺跡では、縄文時代前期後半の竪穴建物跡 1 棟、捨て場 1 か所、盛土 1 か所のほか時期不明を含む土坑 3 基、柱穴 42 基、溝跡 2 条が確認されています。

遺物の概要

外の沢(4)遺跡では土器・土製品が段ボール箱で 6 箱、石器・石製品が 1 箱分出土しました。外の沢(5)遺跡では土器・土製品が段ボール箱で 110 箱、石器・石製品が 18 箱分出土しました。石器の数量が比較的少ないのが両遺跡の特徴です。石鏃・石匙・石皿など完成品の割合が通常よりも多く、石器製作に伴う石核等^{せきかく}は少ないものでした。南西方向に 1 km ほど離れた薬師遺跡など、石器製作を行っている周辺の大きな集落から完成品が持ち込まれている可能性があります。

遺跡の特徴

外の沢(5)遺跡では埋没谷に形成された捨て場から縄文時代前期後葉から末葉にかけての遺物がまとまって出土しました。まとまり毎にブロックとして捉え、数回にわたる取り上げを行いました。今後の整理作業で、上下で細かな時間的な変化が無いか調べる予定です。盛土は縄文時代前期中葉のもので、捨て場とは別の埋没谷付近に形成されていました。土器や炭化物を含む人為堆積土が確認できましたが、後の水流によって削られており不明な点が多い状況です。その上面や側面、埋没谷自体も水成層が厚く堆積していました。

(齋藤 岳)



外の沢(5)遺跡の捨て場遺物出土状況

釜ノ平(2)遺跡

― 飛砂に埋もれた縄文遺跡 ―

所在地：東通村大字野牛字釜ノ平

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成 29 年 7 月 11 日～10 月 26 日

調査原因：野牛地区漁港関連道整備事業

遺跡の概要

釜ノ平(2)遺跡は、東通村役場から北へ約 9 km、津軽海峡を見下ろす標高約 20 m の海岸段丘上に位置しています。当地は季節風によって運ばれたと考えられる砂が厚い場所で 2 m 以上堆積しており、旧地形と現地形が大きく異なる様相を示しています。3,500 m²を調査し、縄文時代早期(約 8,000 年前)～縄文時代後期(約 4000 年前)の遺構や遺物が出土しました。

遺構の種類

今回の調査で検出した遺構は、土坑 7 基、溝状土坑 1 基、焼土跡 3 ヶ所、性格不明遺構 2 基です。

遺物の概要

土器が段ボール箱で 6 箱、石器が段ボール箱で 10 箱が出土しました。土器は縄文時代早期～後期のもので、当地が断続的に利用されたことを示しています。出土量が多いのは縄文時代後期前葉で、縄文時代前期前葉が次いで多くなっています。土器片を利用した錘(土器片錘)も出土しています。

第 2 号土坑の堆積土から、縄文時代後期前葉の土器片とシジミと思われる二枚貝の貝殻が出土しました。貝殻は一定のまとまりがみられ、少なくとも 2 回に分けて捨てられたことが考えられます。遺物の多くは遺跡西側の斜面から出土しています。

遺跡の特徴

調査によって、当遺跡は海が見える西側に遺物や遺構が集中することがわかりました。住居が検出されなかったことから、調査区は集落の外れであったと考えられます。また、縄文時代より後の生活痕跡は全く確認できませんでした。当地は少なくとも古代以降に急激な環境変化が起き、風で巻き上げられた海岸の砂が厚く堆積したことで、人々の生活に適さない環境へ変化したことが想定されます。(加藤 渉)



第 2 号土坑・二枚貝出土状況

うしろたい 後平(1)遺跡

ー縄文・弥生・続縄文時代の遺跡ー

所在地：上北郡七戸町字後平

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成29年4月20日～8月31日

調査原因：一般国道45号天間林道路建設事業

遺跡の概要

後平(1)遺跡は、坪川やその支流によって開析され台地状となった扇状地縁辺に立地しています。坪川を挟んだ対岸には、弥生時代から続縄文時代、飛鳥、奈良、平安時代の集落遺跡で、平成5年(1993)に国立歴史民俗博物館が発掘調査を行った森ヶ沢遺跡が所在しています。後平(1)遺跡は平成28年度(2016)と平成29年度(2017)の2カ年にわたって発掘調査を行い、以下の成果を得ました。

遺構の種類

縄文時代中期後葉～後期初頭の堅穴建物跡5棟、土坑12基、溝状土坑12基が見つかりました。堅穴建物跡は石囲い炉や地床炉などがつくられています。これらは壁側に偏在する特徴を持っています。床面からは、土製の耳飾りや、ほぼ完全な形に復元できる土器が出土しています。土坑は断面形からフラスコ形、浅鉢形、深鉢形をしたものに分けることができますが、フラスコ状土坑の中では底面から全く壊れていない深鉢形土器が横転した状態で2点並んで出土したものもあります。深鉢形をした土坑の底面からは杭を刺したと考えられる痕跡が見つかり、落とし穴として使用されたことが考えられます。

浅鉢形の土坑は、平面形や規模の類似するものが3基ないしは、2基並んで見つかり、きわめて近い時期に造られた可能性が考えられます。この中の1基から、続縄文時代の土器破片が出土したことから、同時代の土坑群である可能性があります。

遺物の概要

遺物は段ボール箱で13箱分出土しました。

縄文時代中期～後期の土器、弥生時代前期～後期の土器、他に少量ですが、北海道に起源を持つ続縄文時代の後北式土器^{こうほくしき}も出土しています。

遺跡の特徴

ほ場整備により現在は平坦な地形となっている後平(1)遺跡ですが、本来は小さな沢が入り込む起伏のある地形であったことが分かりました。

縄文時代には、この沢地に集まった獣を対象に落とし穴がつくられました。また、中期後葉から後期初頭の時期には集落がつくられました。続縄文時代の遺構や遺物は発見例が少なく、同時代の様相を探る上でも貴重な成果と言えます。



(小山浩平)

土坑底面から並んで出土した土器

よねやま 米山(2)遺跡

－ 縄文時代の環状集落跡 －

所在地：青森市大字宮田字米山

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成 29 年 4 月 20 日～ 10 月 25 日

調査原因：新青森県総合運動公園整備事業

遺跡の概要

米山(2)遺跡は、青森市の東部、宮田地区の新青森県総合運動公園内にあります。遺跡の周辺は、東側にそびえる標高 648 m の東岳から流出した土石流などの影響を強く受けた地形環境にあります。それでも、多くの遺跡が所在しており、これまでに、本遺跡の他に、上野尻遺跡や宮田館遺跡など、縄文時代や平安時代から中世の集落跡が見つかっています。

今年度の発掘調査は野球場建設に伴うもので、昨年度に引き続き 2 年目の調査となります。

遺構の種類

縄文時代と中世の竪穴建物跡 9 棟、井戸跡を含む土坑 141 基、カマド状遺構 4 基、溝跡 19 条、柱穴 1604 基などを検出しました。その他に、縄文時代の自然流路に土器を多量に捨てた遺物捨て場を 5 箇所で確認しました。

遺物の概要

遺物は段ボール箱で 209 箱分出土しました。多くは縄文時代後期後半の土器や石器で、捨て場から出土しています。その他、少量ですが、縄文時代早期や弥生時代、中世の土器や陶器もみられました。また、中世の井戸跡からは、椀や箸などの木製品も出土しています。

遺跡の特徴

調査の結果、縄文時代後期後半と中世の集落跡が見つかりました。

縄文時代の集落では、6 本の柱を亀甲形に建てた掘立柱建物跡が環状に並んでいた可能性がでてきました。また、掘立柱建物跡群の周囲には、捨て場や土坑が集中する地区があったことも明らかとなっており、当時の集落景観を知る上でも貴重な成果と言えます。

さらに、本遺跡のすぐ近くには、同じく掘立柱建物跡を環状に配置する縄文時代の上野尻遺跡があり、注目されます。

(鈴木和子)



柱を支えるために柱穴の底に敷かれた石（第 1796 号柱穴）

かめがおか 亀ヶ岡遺跡

－ 縄文時代晩期の土坑墓群 －

所在地：つがる市木造館岡亀山地内ほか

調査機関：つがる市教育委員会

調査期間：平成 29 年 7 月 1 日～ 11 月 30 日

調査原因：史跡追加指定を目指した内容確認調査

遺跡の概要

亀ヶ岡遺跡は、日本海沿岸に南北に連なる屏風山砂丘地^{びょうぶさん さきゅうち}に位置します。遺跡の地形は、東に張り出す標高 7 ～ 18 m 程度の台地（亀山地区^{かめやま}）と、台地の北側と南側の低湿地（近江野沢地区^{おうみのさわ}・沢根地区^{さわね}）に分けられます。南北の低湿地からは漆塗土器や遮光器土偶など多数の遺物が出土することで古くから知られ、明治時代以降、東京大学や慶應義塾大学、青森県立郷土館など多くの研究機関により発掘調査が積み重ねられてきました。昭和 19 年には、北側に隣接する田小屋野貝塚^{たごやのかいづか}とともに国の史跡に指定されています。平成 20 年以降、つがる市教育委員会では史跡の追加指定を目指して、史跡に隣接する西側台地を中心とした範囲内容確認調査を継続して進めてきました。その結果、史跡範囲外の台地上にも縄文時代前期から晩期にかけての遺構・遺物が広範囲で確認されています。

遺構の種類

今年度の調査地点は史跡内の 4 地点、史跡外の 1 地点です。史跡内では、過去に調査の及んでいない台地北側の内容確認を目的として約 220 m²を調査しました。

近江野沢に面した東側台地地点で検出された遺構は、縄文時代晩期の土坑墓 48 基、土坑・ピット 13 基、埋設土器 1 基、焼土遺構 1 基です。土坑墓の平面形状はおもに長楕円形で、長軸の長さは 1.0 ～ 1.5 m 程度のものが多いですが、中には 0.5 ～ 0.7 m と小規模なものもあります。調査した土坑墓の中には、上面にロームマウンドを伴うものや、底部に周溝を伴うものがあります。また、いくつかの土坑墓では副葬品が出土し、底面に赤色顔料の分布が確認されました。



縄文時代晩期の土坑墓群

近江野沢に面した西側台地地点で検出された遺構は、縄文時代前期から中期にかけてのフラスコ状土坑13基、縄文時代晩期の土坑墓13基、焼土遺構1基などです。

縄文時代晩期の土坑墓の特徴は、近江野沢の東側台地調査地点とおおむね似ていますが、明確な副葬品は出土していません。

史跡外では、平成21年に縄文時代晩期の竪穴建物跡1軒が見つかった調査区の隣接地点、約70㎡を調査しました。縄文時代晩期の遺構は確認できませんでしたが、縄文時代中期から後期にかけての土坑・ピット30基、焼土遺構1基が検出されました。

遺物の概要

今年度の調査では遺物包含層は確認されず、出土した遺物は縄文時代前期から晩期にかけての土器・石器・石製品など段ボール箱3箱分です。近江野沢に面した東側台地地点では、1基の土坑墓から120点程度の緑色凝灰岩製の玉が出土しました。また、他の土坑墓からは底面付近でヒスイ製の玉1点が出土しました。

遺跡の特徴

今年度の調査の結果、近江野沢に面する台地上には縄文時代晩期の土坑墓群が広範囲に広がることが明らかになりました。台地上の墓域と低湿地の捨て場が隣接するという位置関係は、史跡南側でも確認されていることから、亀ヶ岡遺跡における縄文時代晩期の土地利用を考えるうえで重要な特徴と考えられます。

また、台地上に広域に分布すると考えられる土坑墓群は、地点ごとに副葬品の内容に違いがあることも分かってきました。土坑墓群の年代や規模・形状、長軸方向、埋葬された死者の頭位方向、副葬品についての情報を整理することで、亀ヶ岡遺跡における墓域の特徴を明らかにすることが今後の課題です。（羽石智治）



周溝を伴う土坑墓群（近江野沢の東側台地）



土坑墓群から出土した緑色凝灰岩製の玉

くまのどう 熊野堂遺跡

－馬淵川下流に面した平安時代の拠点集落－

所在地：八戸市長根二丁目及び大字売市

調査機関：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

調査期間：平成 29 年 4 月 18 日～6 月 9 日

調査原因：道路拡幅工事

遺跡の概要

熊野堂遺跡は、八戸市を北東方向に流れる馬淵川の河口から約 5 km 内陸に入った右岸に位置し、標高 16 m ほどの低位段丘の先端につくられた古代の集落跡です。今年度の発掘調査面積はわずか 307.6 m²ですが、平安時代における集落の生業活動や他地域との交流を示す重要な遺構・遺物がみつかりました。

遺構の種類

主な遺構として平安時代の竪穴建物跡 14 棟、鍛冶炉^{かじろ} 5 基、土坑 39 基、溝 4 条が検出されています。竪穴建物跡は一辺 2.5 ～ 5 m 前後の方形や長方形です。南、北、東の壁にカマドがあるもの、ないものがあります。大部分は廃棄後ロームブロックのほか灰や焼土などで人為的に埋め戻されています。土坑は円形・楕円形・方形のものがあ、直径 50 ～ 240cm、深さ 5 ～ 100cm とばらつきが多いです。何に使われたかよくわかりませんが、土坑も人為的に埋め戻されたものが大半を占めます。溝は集落内を区画する幅の狭い溝がみつかっています。いずれも南西～北東方向にのびるもので幅 40 ～ 130cm、深さ 20 ～ 85cm です。鍛冶炉は調査区北側からまとまってみつかりました。円形、楕円形で大きさは径 40cm ほどのものと、100cm の大きなものがあります。炉壁の粘土がわずかに残っているものもみられました。近くの土坑には鍛冶作業の時に生じる鍛造剥片^{たんぞうはくへん}とよばれる鉄薄片が廃棄されており、鍛錬による鉄器づくりの状況が明らかとなりました。

遺物の概要

遺物は、土師器、須恵器^{りよくゆう}、緑釉陶器、鉄製品などのほか鍛造剥片・鉄滓^{てつさい}、韃^{ふいご}の羽口等の鉄器製作に関わる遺物、さらには獣骨、穀類などがみつかっています。土師器は坏、甕があり坏には灯明皿に使われたものがあります。須恵器には五所川原窯跡で焼かれた壺があり、刻書がみられます。緑釉陶器は八戸市内の遺跡では初めての出土例です。滋賀県付近の窯で生産（近江産）されたとみられ、直接か間接かはわかりませんが本遺跡まで運ばれてきています。穀類では土坑からコメが出土しています。

遺跡の特徴

これまでの調査成果から、平安時代の熊野堂遺跡は集落の南側に幅広い大溝が巡り、「防御性集落」、「環濠集落」とよばれる形をとります。特に 10 世紀後半には、竪穴建物や土坑の作り替えが著しく、人びとの継続した定住生活の様子が明らかになってきています。

さらに今回の調査で複数の鍛冶炉がまとまってみつかったことは、熊野堂遺跡で出土する様々な鉄器類（武器、農耕具、馬具など）が集落内で製作されていたことを示しており、また今回の調査区である馬淵川に近い集落の北東端側において、生業の鍛冶が行われていたことがわかりました。

もう一つ、滋賀県付近で焼かれた緑釉陶器がどのような経路で、いくつの場所を経て流入したのかはわかりませんが、当時の平安京近郊と八戸という遠距離がつか

がっていたことは、今回の緑釉陶器の出土で確かなものとなりました。平安時代の八戸において、河川を利用し内陸部、沿岸部に移動しやすい低位段丘に立地した熊野堂遺跡は、人が集まりやすく、外へも出やすい環境であるため、交易・交流の拠点でもあったと思われます。（苧坪裕樹）



鍛冶炉の様子



緑釉陶器皿（近江系）

遺跡の概要

坂本館は、弘前駅から南西へ11km、岩木川支流の蔵助沢側左岸の段丘上、標高約82～98mに位置しています。市道改築に伴い、平成28・29年度の2か年で約2,480㎡を調査しました。中世の城館として周知されている遺跡ですが、調査の結果、縄文時代・平安時代・室町時代の複合遺跡となることが分かりました。

遺構の種類

縄文時代の竪穴建物跡、フラスコ状土坑、配石遺構、捨て場、土器埋設遺構、平安時代の竪穴建物跡、平安時代以降の溝跡、柱穴跡、時期不明の畝状遺構^{うねじょういこう}などの遺構を検出しました。

縄文時代のフラスコ状土坑は、39基が見つかりました。縄文時代前期末に属するもので、内部からは完形に近い土器が多数出土しています。配石遺構は、平滑な川原石を直線的に配置しています。斜面地に構築されており、通路などの実用的な用途も想定されます。

平安時代以降と考えられる溝跡は、幅約4m、深さ約1.8m、延長約20mの規模を測り、逆台形の形状をしています。台地南西端部で途切れて土橋のような箇所があります。溝跡の年代については、底部付近から平安時代の土器が出土し、覆土上面から11世紀後半の古銭が出土していることから、11世紀半ばには廃絶していたことが想定されます。土橋状の構造は出入口と考えられ、中世城館的な様相を示しています。今後も事例調査などの検討が必要となります。

遺物の概要

出土遺物は、縄文土器や石器が大半を占めており、その他、少量の陶磁器、土師器、古銭等が出土しています。縄文土器は前期末の円筒下層d式が大半を占めており、そのほか後期と晩期の土器が出土しています。土師器は少量ですが、10世紀後半のものと考えられるものが出土しています。陶磁器では、15世紀の中国産の青磁が溝跡の検出面から出土しています。

遺跡の特徴

調査の結果、遺跡内には縄文時代前期末のムラの跡があることが分かりました。また、台地縁辺を巡る溝跡では、時期を決定する資料が少ないものの、土橋状の構造を伴うことが判明するなど、貴重な成果を得ることができました。

(佐藤 信輔)



坂本館空撮写真

しのづか 篠塚遺跡

一溝に囲まれた中世の生産施設

所在地：青森市大字上野字篠塚地内

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成 29 年 5 月 1 日～ 6 月 30 日

調査原因：県営上野地区農地整備事業

遺跡の概要

篠塚遺跡は、青森市役所庁舎から南へ約 6 km の位置に所在し、陸奥湾に注ぐ荒川右岸の扇状地端部に立地します。標高は約 14 m 前後です。約 8,700 m²を調査し、中世を中心とする遺構と遺物を検出しました。

遺構の種類

竪穴建物跡 9 棟、土坑（井戸跡含む）76 基、カマド状遺構 87 基、溝跡 29 条、柱穴 940 基を検出しました。竪穴建物跡 2 棟は平安時代のものであることが分かっていますが、遺構のほとんどは出土遺物や配置などから、中世（15 世紀前後）のものであると考えられます。

遺物の概要

段ボールで 27 箱分出土しました。縄文時代晩期の土器、平安時代の土師器、中世の珠洲産の播鉢、中国の浙江省に所在した龍泉窯^{りゅうせんよう}で作られた青磁が出土しています。その他、古銭、漆椀、石製品、石臼なども出土しています。縄文時代晩期の土器は破片のみでいずれも摩耗していることから、荒川の氾濫などで流されてきたものと考えられます。平安時代の土師器はそのほとんどが竪穴建物跡の内部から出土しました。中世の遺物は溝跡や土坑を中心に出土しています。

遺跡の特徴

調査の結果、中世の遺構は人為的に掘られた溝で囲まれ、調査区北側を中心に確認されました。一方、自然流路を利用した溝で囲まれた平安時代の遺構は南側でのみ確認されていることから、時期によって人々の活動域が異なることが分かりました。また、中世のカマド状遺構や井戸跡などが多数発見されながらも、日用雑器の土器などがほとんど出土しなかったことから、当該期の何らかの生産施設であったと考えられます。竪穴建物跡は小型で柱穴もみられないため、作業場や倉庫などとして使用された可能性があります。また、カマド状遺構や溝跡には重なり合っているものがあることから、繰り返し同じ土地を利用していたといえます。

（久保友香理）



カマド状遺構完掘状況

しせきつがるししろあとひろさきじょうあと
史跡津軽氏城跡弘前城跡
ひろさきじょうにのまる
弘前城二の丸

— 殿様をご覧になった馬術稽古の場 —

所在地：弘前市大字下白銀町1番地

調査機関：弘前市都市環境部公園緑地課

弘前城整備活用推進室

調査期間：平成27年6月22日～平成29年8月31日

調査原因：史跡整備（弘前城二の丸利活用施設等整備事業）

遺跡の概要

弘前城は慶長16年（1611）に、弘前藩2代藩主津軽信枚が築城した海拔約50mの舌状台地に立地している平山城である。6つの曲輪と三重の水濠から成る城郭構造が現存しており、その全域が昭和27年（1952）に史跡指定されている（指定面積49.4ha）。

二の丸は、城の中央西寄りに位置する本丸の南東側を逆L字型に取り囲む曲輪である。築城当初は侍屋敷が所在していたが、元禄期における侍屋敷の郭外移転後大きく変化し、曲輪北側では御広敷（二の丸御殿）、南側では馬場、馬屋、太鼓櫓、御宝蔵等が設置される。明治以降になると、これらの施設はすべて取り壊され、大正にかけて飲食店が建てられる。その飲食店も昭和40年代には全て城外移転され、現在は、北側には児童遊園地と移築復元された与力番所が、南側は藩政時代からの樹木の残る緑地が広がる。これまでの発掘調査では、昭和57・58年度のトレンチ調査により馬場の砂層が確認されていたが、その後面的な調査は行われていなかった。

今回の史跡整備に伴い、平成26年度の試掘調査を経て平成27年度から調査を開始した。

遺構の種類

馬場跡（小土塁、硬化面、砂層、溝、柱穴列）、御高覧所跡、御宝蔵跡、城道跡2条などが確認されており、いずれも御城郭分間真図（文化2年）に描かれるのとはほぼ同じ位置で確認されている。

遺物の概要

瓦（軒丸：連珠巴文、卍文）、肥前磁器（17世紀後半）など。

遺跡の特徴

弘前城二の丸馬場は、近年に調査された高照神社馬場に続き、残存率が良好な遺構である。また、馬場の全体像がわかる調査は全国的にも例が少なく、今回の調査は大変貴重な成果と言える。高照神社馬場と比較すると、構造は類似するものの砂層の特徴に違いが見られ、神事用の高照神社馬場と馬事稽古等に用いられた二の丸馬場とでは後者の砂層の方が硬く踏み締められている。今後は、調査成果を踏まえ、馬場等の復元整備やガイダンス施設（利活用施設）を整備する予定である。（蔦川貴祥）



馬場小土塁南端掘削状況（南東から）

くぐりいし 潜石(2)遺跡

ー 津軽海峡に面した北辺の遺跡ー

所在地：下北郡風間浦村大字蛇浦字潜石

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成 29 年 4 月 19 日～6 月 9 日

調査原因：県営下北北部地区中山間地域総合整備事業

遺跡の概要

潜石(2)遺跡は、下北半島の北西部、風間浦村役場から北西 5 km の地点にあり、津軽海峡に面した、標高 15 ～ 35 m の丘陵上に立地しています。晴れた日には、北海道亀田半島の恵山を望むことができ、遺跡の周囲は山林となっています。調査は 2 ヶ年にわたって行われ、昨年度は丘陵縁辺部である調査区北東域の緩斜面と中央域の斜面を調査し、竪穴建物状遺構等が検出されています。今年度は、調査区南西域の平坦地を調査しました。

遺構の種類

今年度の調査では、溝跡 2 条、用途不明遺構 14 基が見つかりました。

今年度の調査で見つかった用途不明遺構は、平面形が不整形で、深さは 30 cm 未満の浅い掘り込み状のものです。断面形状は皿形に近いものが多く、底面には起伏が認められ、溝が不定方向にみられるものもありました。また、底面から焼土や炭化材が確認されたものがありました。堆積土中には炭化物粒や焼土粒・粘土ブロックの混入が認められ、中には火山灰が堆積したものもありました。この火山灰は分析の結果、平安時代に降下した十和田 a 火山灰もしくは白頭山・苦小牧火山灰と分かり、遺構内に再堆積したものと推定されます。昨年度検出した竪穴建物状遺構と同様、遺物は出土しなかったため、詳細な用途や年代は不明ですが、出土した炭化材を年代測定した結果、6 世紀代、8 世紀後葉～10 世紀中頃、11 世紀前半・11 世紀後葉～12 世紀中頃、13 世紀後葉～14 世紀前葉・14 世紀後半の年代が得られました。

遺物の概要

遺物は、遺構外から石鏃等の縄文時代の石器が段ボール箱で 1 箱分出土しました。

遺跡の特徴

今年度の調査の結果、段丘上面の平坦面である調査区南西域には、10 基以上の用途不明遺構が存在していたことが分かりました。主体となる時代は平安時代～室町時代と推測されます。

今後は、昨年度の調査で検出された竪穴建物状遺構の関連性について、より詳細な検討が必要です。

(平山明寿)



用途不明遺構調査状況

用語解説

【飛鳥時代】 あすかじだい

6世紀末から7世紀にかけて、飛鳥地方を都とした推古朝を中心とする時代。

【押型文土器】 おしがたもんどき

彫刻した棒の回転によって、施文される縄文時代早期を中心とした土器。

青森県では早期前葉の日計式土器があり、山形文が多く、菱形文も見られる。

【御広敷】 おひろしき

藩主家が住んでいた御屋敷。弘前城二の丸北側にあった。

【海成段丘】 かいせいだんきゅう

海岸段丘。過去の海底が相対的に隆起して形成された、階段状の地形。

【貝塚】 かいづか

食料とされた貝の殻が堆積した跡。貝殻のカルシウムにより土壌が中和されるため、通常の遺跡では残りにくい動物・魚の骨などが残存する。土器や石器の出土をはじめ、人や犬が埋葬される場合もあり、単なるゴミ捨て場ではなくモノを送る場でもあったとも考えられている。

【鍛冶】 かじ

金属の製品化や修理の工程。鍛冶炉の周辺から羽口や鉄滓、鍛造剥片などが出土することが多い。

【カマド状遺構】 かまどじょういこう

長楕円形の浅い掘り込みをもち、壁面の一方に焼け面を伴う遺構。中世の遺跡で検出されることが多く、屋外のカマドと考えられている。

【亀ヶ岡式土器】 かめがおかしきどき

青森県木造町（現つがる市）所在の亀ヶ岡遺跡を指標とする縄文晩期の代表的土器。雲形文や工字文といった流麗な曲線模様を特徴とする。遮光器土偶も亀ヶ岡文化の特徴の一つである。

【旧石器時代】 きゅうせっきじだい

人類が打製石器を主要な利器として使用していた時代。このうち、更新世後期終末の3万5000年～1万5000年くらい前の時期を後期旧石器時代という。

【曲輪】 くるわ

城館を構成する空間の基本的な単位であり、土塁や堀などの防御施設で囲まれた平坦地をいう。本丸など主要な曲輪の外側に带状に設けた曲輪を帯曲輪と呼んでいる。

【御高覧所】 ごこうらんしょ

弘前城二の丸馬場にあった、藩主が藩士の馬術の稽古などを高覧した建物。藩主が城にいた時だけの仮設建物。

【五所川原窯跡群】 ごしょがわらかまあとぐん

日本最北の須恵器窯跡。9世紀後半に生産が開始され、その後、持子沢地区から前田目地区で盛んに生産された。青森県内のほか、北海道西半域や秋田県北域、岩手県北域を中心に供給された。

【御宝蔵】 ごほうぞう

津軽氏の「御系図」などの重要書類や、「御重代御太刀」などの宝物、「御備金」などが収められていた土蔵。大きさは東西「三間」南北「五間」とされる。

【後北式土器】 こうほくしきどき

→【続縄文時代】参照。

【遮光器土偶】 しゃこうきどぐう

北方民族が使用した雪メガネのように、目が大きく表現された亀ヶ岡文化に特徴的な土偶。近年、群馬県でも北東北製作品の出土が報じられた。兵庫県神戸市でも破片資料が出土している。

【集石遺構】 しゅうせきいこう

大小の礫が多数集まった遺構。集石の下に土坑が見られるもの、火を受けて焼

け石となっているものなどがある。

【焼土遺構】しょうどいこう

土が赤く焼けた、火を焚いたと考えられる痕跡の総称。

【須恵器】すえき

青く硬く焼き締まった土器で、古墳時代の中頃（5世紀前半）に朝鮮半島から伝わった焼成技術をもって焼いた焼き物のこと。

【珠洲焼】すずやき

平安時代末期から室町時代にかけて、能登半島先端の珠洲周辺で生産された陶器。主に壺・甕・すり鉢が生産され、その製品は北陸から北海道にいたる日本海沿岸地域に流通した。

【捨て場・捨て場遺構】すてば・すてばいこう

一定のまとまった範囲に遺物が人為的に廃棄・集積された場所。

【擦切磨製石斧】すりきりませいせきふ

断面U字状の石製擦切具の往復運動で、擦り切った石を素材とした磨製石斧。縄文時代早期～中期頃の北海道・青森県域に多く見られる。

【製塩土器】せいえんどき

海水を土器に入れ、煮詰めて塩を得るための土器。縄文時代晩期のものは薄手で、外面には粘土の輪積痕が残っているものが多い。青森県では縄文時代晩期と平安時代に多く見られる。

【青磁】せいじ

磁器の1種。釉の中の僅かな鉄分が、高火度還元炎焼成によって青緑色を帯びる。中国の越州窯・龍泉窯が名高い。日本では江戸初期頃から生産開始。

【製鉄】せいてつ

鉄鉱石や砂鉄から鉄を抽出する作業。製鉄遺跡からは、鉄を製錬した製鉄炉、燃料となる木炭を生産した炭窯のほか、

炉を構築するための粘土を採掘した土坑（粘土採掘坑）が認められることもある。遺跡では、鉄塊・鉄滓・炉壁・羽口が出土することが多い。

【石核】せきかく せっかく

石器の素材剥片を剥がした際に残された残核。

【石刃技法】せきじんぎほう

縦長で両側辺が平行する剥片（石刃・ブレード）を連続剥離する技術。主に旧石器時代に特徴的な技術で、得られた剥片はナイフ形石器・彫刻刀形石器・スクレイパー類などの素材として用いられた。

【扇状地】せんじょうち

川が山地から平地へ流れ出る所にできた、扇形の堆積地形。川の勾配が急に小さくなり、流水の運搬力が急減するため、砂礫が堆積してできる。

【続縄文時代】ぞくじょうもんじだい

北海道を中心に縄文時代に後続する時代で、本州の弥生時代から古墳時代中頃に相当する。後半期には後北式土器が広く展開し、東北地方にまで分布するようになる。

【太鼓櫓】たいこやぐら

時を知らせる太鼓を鳴らした櫓。弘前城二の丸辰巳櫓の西側にあった。

【竪穴住居・竪穴建物】たてあなじゅうきょ・たてあなたてもの

地面を掘り下げて床とし、その上に屋根をふいた住居を竪穴住居という。本県では縄文時代から平安時代までの一般的な家屋である。煮炊きの施設として炉が伴い、古墳時代以降は炉に代わりカマドが壁際につくられるようになる。住居以外の機能も含む建物については、竪穴建物と呼称することもある。

【炭素窒素同位体分析】たんそちっそどう

いたいぶんせき

出土人骨のコラーゲンや土器付着物に残る炭素・窒素の種類の割合を測定し、個人の食生活や土器の煮沸物を明らかにする分析。C3植物（ドングリ・クリ・イネ・ムギ等）、C4植物（ヒエ・アワ等）、草食動物、海生魚介類、海生哺乳類などが明らかとなる。

【鍛造剥片】 たんぞうはくへん

小鍛治（こかじ:代表的なのは刀鍛治）の際に飛び散る不純物の微細片。

【鉄滓】 てっさい

大鍛治（製鉄・精錬作業）の段階で原料鉄から分離される不純物の塊。通称カナクソ。

【貯蔵穴】 ちょぞうけつ

貯蔵用の穴倉と考えられる土坑。断面フラスコ形のものの多くは貯蔵用と想定される。後に墓に転用したと解釈されるものもある。

→【土坑・土坑墓】参照。

【土器片錘】 どきへんすい

土器のかけらの両側に紐掛け用の刻み目を入れた漁網用と考えられる錘。青森県では縄文時代前期前葉に多く用いられた。

【土器埋設遺構】 どきまいせついうこう

深鉢や円筒形の土器をほぼ原型を保ったまま埋設した遺構。炉や入り口などの屋内や、屋外にもつくられる。人骨など埋葬が明らかな例では甕棺と呼ばれることがある。

【土坑・土坑墓】 どうこう・どうこうぼ

土坑は地面に掘られた穴の総称。貯蔵施設と考えられるフラスコ状土坑（断面の形がフラスコに似ている）や、落とし穴と考えられる溝状土坑（Tピット）とよばれるものなどがあり、墓として用いられたものは土坑墓（土壙墓）とよばれる。柱穴などの小さな穴をピットと呼ん

で区別することもある。

【土橋】 どぼし

堀・濠を横断する通路として設けられる土の堤をさす。

【ナイフ形石器】 ないふがたせっき

素材の剥片の鋭い縁辺を一部に残し、その他の部分に刃つぶし加工がなされたもので、切る・削る・突き刺す道具と考えられる。日本の後期旧石器時代を代表する石器。

【羽口】 はぐち

ふいごの口部分にあたる土製品。

【白頭山－苦小牧火山灰（B-Tm）】

はくとうさんとまこまいかざんばい

西暦940年頃に降り積もった朝鮮半島北部の白頭山の噴火に由来する火山灰。火山灰は短期間で広範囲に降下するため、複数の遺跡・遺構の年代を知る重要な指標となる。

【土師器】 はじき

弥生式土器の流れを汲み、古墳時代～奈良・平安時代まで生産され、中世・近世のかわらけに取って代わられるまで生産された素焼きの土器を指す。

【貼床】 はりゆか

住居の内部に土を貼って土間状とした施設。

【飛砂】 ひさ

海岸の砂浜や砂漠の砂が風によって移動する現象。

【ピット】

→【土坑・土坑墓】参照。

【鞆／吹子／吹草】 ふいご

火力を強めるための送風装置。箱の中のピストンを動かして風を送る。

【フラスコ状土坑】 ふらすこじょうどうこう

→【土坑・土坑墓】参照。

【**防御性集落**】 ぼうぎよせいしゅうらく

10世紀後半～11世紀代に青森県を中心に営まれた、壕・土塁・柵列で区画された古代集落。背景に蝦夷社会内の可耕地や交易等を巡る緊張状態が指摘されている。

【**放射性炭素年代測定**】 ほうしゃせいたんそねんだいそくてい

生物中に含まれる炭素 14 が、死滅後 5730 年で半分の量になる性質を利用した年代測定。試料中の放射線量を測定することで年代を割り出すことができる。

【**掘立柱建物**】 ほったてばしらたてもの

地面に穴を掘って柱を立てた、平地式や高床式の建物。

【**堀（濠・壕）**】 ほり

地面を細長く掘り下げ一定の範囲を区画する遺構。集落や城郭、町、墳墓の周囲に設けられることが多い。

【**埋設土器**】 まいせつどき

→【土器埋設遺構】参照。

【**溝状土坑**】 みぞじょうどこう

Tピットとも呼ばれる。

→【土坑・土坑墓】参照。

【**森ヶ沢遺跡**】 もりがさわいせき

七戸町の縄文時代～平安時代にわたる遺跡。国立歴史民俗博物館による発掘調査で、古墳時代中期（5世紀）にあたる土坑墓 20 基の調査が行なわれた。土坑墓では本州古墳文化の土師器・須恵器と北海道続縄文文化の北大式土器が共伴し、さらにガラス玉・鉄製品・コハク玉・黒曜石片も出土しており、南北文化の融合がうかがわれる。

【**盛土・盛土遺構**】 もりど・もりどいこう

土砂や遺物を継続的に廃棄した結果、周囲よりも高く盛り上がった遺構。

【**龍（竜）泉窯**】 りゅうせんよう

中国浙江省竜泉県を中心に、宋代から明代まで、長期にわたり膨大な青磁を産した窯。製品は日本へも鎌倉・室町時代に盛んに輸入された。

【**緑釉陶器**】 りょくゆうとうき

銅により緑色に発色した釉薬をかけた陶器。奈良時代には唐（現在の中国）から伝わったとされるが、県内では平安時代の遺跡で少数確認される。

【**炉**】 ろ

調理や暖を取るために繰り返し火を焚いた場所。地面で直接火を焚いた地床炉、周囲を石で囲った石囲炉、土器を埋め込んだ土器埋設炉、土器片を敷き詰めた土器片敷炉など、時期・地域によって様々な種類がある。縄文時代中期末葉には土器埋設炉と石囲炉が組み合わせられた複式炉とよばれるものもある。住居の中に作られたものを屋内炉、外に作られたものを屋外炉と呼ぶこともある。

■引用・参考文献■

青森県 2001『青森県史 自然編 地学』

青森県 2017『青森県史 資料編 考古 1』

青森県 2005『青森県史 資料編 考古 3』

阿部猛ほか編 1995『日本古代史研究事典』東京堂出版

江坂輝禰ほか編 1983『日本考古学小辞典』ニューサイエンス社

大川清ほか編 1996『日本土器事典』雄山閣

小野正敏ほか編 2007『歴史考古学大辞典』吉川弘文館

加藤晋平・鶴丸俊明 1980『図録石器の基礎 知識 I - 先土器（上）-』柏書房

旧石器文化談話会編 2000『旧石器考古学辞典』学生社

小林達雄監修 2008『総覧縄文土器』アム・プロモーション

田中琢・佐原真ほか編 2002『日本考古学事典』三省堂

デジタル大辞泉

八戸市 2015『新編 八戸市史 通史編

ブリタニカ国際大百科事典

年 表

年 代	時代・時期		県内の代表的な遺跡	主な土器・石器など	県内の主なことがら
約30,000年前	後期旧石器時代		安部 (東通村) 田向冷水(八戸市), 内田(2) (むつ市) 大平山元Ⅱ・Ⅲ(外ヶ浜町) 五川目(6)(三沢市)	ナイフ形石器 槍先形尖頭器 細石刃	針葉樹林帯における狩猟・採集生活 氷河期の終焉
約15,000年前	縄 文 時 代	草創期	長者久保(東北町) 大平山元Ⅰ(外ヶ浜町) 表館(1)(六ヶ所村) 黄檗(八戸市) 櫛引(八戸市)	局部磨製石斧 無文土器 隆起線文系土器 爪形文系土器 多縄文系土器	土器づくりが始まる(最古の土器) 弓矢による狩猟の発達 落葉広葉樹林帯の形成 定住生活
約9,000年前		早 期	日計(八戸市), 柄貝 (階上町) 吹切沢(東通村) 根井沼(三沢市) 早稲田(1) 貝塚 (三沢市)	押型文系土器 沈線・貝殻文系土器 条痕文系土器 縄文系土器	縄文海進の始まり 貝塚の出現、尖底土器の使用
約6,000年前		前 期	柄貝 , 釜ノ平(2) (東通村) 畑内遺跡(八戸市) 長七谷地貝塚(八戸市) 外の沢(5) (弘前市) 岩渡(4)(青森市)	長七谷地Ⅲ群土器 円筒下層a式土器 円筒下層b式土器 円筒下層c式土器 円筒下層d式土器	円筒土器文化の始まり 大規模集落の形成と大量の土器
約5,000年前		中 期	三内丸山(青森市) 水上(2)(西目屋村) 二ツ森貝塚(七戸町) 一王寺(1)(八戸市) 餅ノ沢(鯉ヶ沢町) 後平(1) (七戸町)	円筒上層a式土器 円筒上層b式土器 円筒上層c式土器 円筒上層d式土器 円筒上層e式土器 大木式系土器	他地域との活発な交易 大規模貝塚の形成 円筒土器文化の終焉
約4,000年前		後 期	葦窪(八戸市), 柄貝 釜ノ平(2) , 内田(2) 十腰内(弘前市) 外の沢(4) (弘前市) 砂子瀬(西目屋村) 風張(八戸市), 米山(2) (青森市)	牛ヶ沢(3)式土器 十腰内Ⅰ式土器 十腰内Ⅱ式土器 十腰内Ⅲ式土器 十腰内Ⅳ式土器 十腰内Ⅴ式土器	十腰内文化の始まり 大規模環状列石の出現 石棺墓・甕棺墓など特殊葬制 祭祀遺構・遺物の多様化 (動物意匠遺物)
約3,000年前		晩 期	川原平(1)(西目屋村) 大森勝山(弘前市) 是川中居(八戸市) 五月女薗(五所川原市) 亀ヶ岡 (つがる市)	大洞B式土器 大洞BC式土器 大洞C1・C2式土器 大洞A・A'式土器	亀ヶ岡文化の始まり 卓越した土器製作技法と豊富な器種 漆文化の発達
約2,000年前	弥生時代	前 期	砂沢(弘前市) 二枚橋(むつ市) 垂柳(田舎館村) 家ノ前(六ヶ所村)	砂沢式土器 二枚橋式土器 田舎館式土器 天王山式土器	米づくりの始まり 遠賀川系土器 稲作と狩猟・採集の生活
	古墳時代	後 期	隠川(11)(五所川原市) 森ヶ沢・ 後平(1) (七戸町) 田向冷水(八戸市) 市子林(八戸市)	土師器・須恵器 後北式・北大式	寒冷な時代 希少な遺跡数 かまど付き方形堅穴住居の構築 北方文化との強い結びつき
(西暦250年頃)	続縄文時代	前 期	隠川(11)(五所川原市) 森ヶ沢・ 後平(1) (七戸町) 田向冷水(八戸市) 市子林(八戸市)	土師器・須恵器 後北式・北大式	寒冷な時代 希少な遺跡数 かまど付き方形堅穴住居の構築 北方文化との強い結びつき
(西暦710年)	飛鳥時代 奈良時代		阿光坊古墳群(おいらせ町) 白蛇(八戸市)	土師器・須恵器	蝦夷の地、律令国家の支配地外 終末期古墳群の造営 馬産の開始
(西暦794年)	平安時代		野木(青森市) 五所川原須恵器窯跡群 熊野堂 (八戸市) 坂本館 (弘前市) 林ノ前(八戸市) 高屋敷館(青森市) 潜石(2) (風間浦村)	土師器 須恵器 灰釉・緑釉陶器 擦文土器 かわらけ 陶磁器(中国産)	集落の急激な増加(集団移住?) 五所川原に日本最北の須恵器窯 塩・鉄関連遺跡の増加 十和田湖の噴火と降灰(915年頃) 白頭山の噴火と降灰(940年頃) 環壕集落や防御性集落の出現 奥州藤原氏の支配
約1,000年前					
(西暦1192年)	鎌倉時代 室町時代		十三湊(五所川原市) 篠塚 (青森市), 坂本館 米山(2) (青森市)	珠洲・常滑・瀬戸 (国産) 青磁・白磁・染付 (中国産)	御家人の配置 安藤氏の繁栄と南部氏の台頭 他地域・国外との交易活発化 中世城館の構築
(西暦1590年)	安土桃山時代 江戸時代		野脇(弘前市) 三戸城(三戸町) 堀越城(弘前市) 弘前城 (弘前市)	肥前系陶磁器 小久慈焼(八戸領) 悪戸焼・下河原焼 (弘前領)	南部氏の支配と津軽氏の独立 盛岡藩・八戸藩・津軽藩の支配

※太字(ゴシック体)は本日発表予定の遺跡

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内 152-15

TEL : 017-788-5701 FAX : 017-788-5702

<http://www.ao-maibun.jp/>



表紙写真 上：貯蔵穴に横位に埋められた縄文時代中期末葉の土器（後平（1）遺跡）

左下：廃棄された縄文時代前期後葉の土器（外の沢（5）遺跡）

右下：廃棄された縄文時代後期後葉の土器（米山（2）遺跡）

裏表紙写真 右上：堀の内外にひろがる中世の遺構群（篠塚遺跡）

右下：廃棄された縄文時代後期後葉の土器群（米山（2）遺跡）

左上：彫刻刀形石器の出土状況（内田（2）遺跡）

左下：落とし穴と考えられる縄文時代の溝状土坑（内田（2）遺跡）

